

## 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

学位申請者	飯塚 有紀【論文博士】 【人間発達科学専攻 平成16年度生】 (平成25年3月31日単位修得退学)	要 旨
論文題目	NICU に入院を経験した低出生体重児とその母親との 最早期における母子関係の構築について	<p>本論文は、タイトルの「NICU に入院を経験した低出生体重児とその母親との最早期における母子関係の構築について」からもわかるように、(1) 理論的には、再早期のアタッチメント形成が、早期の分離を余儀なくされる NICU において、どのように不利益を受け、またそこからどのような道を経て再構築されていくかを論考したものである。</p> <p>また、(2) 臨床的には、こうした再早期の分離体験に臨床心理学(あるいは臨床心理士)が、どのように援助して行けるかという可能性を論じた、きわめて実践的なテーマを持った研究である。</p> <p>特筆すべきは、本来医療独自の領域であるこの分野に、心理学者が参加し、最早期の母子の危機場面についてのデータを得た意義である。</p> <p>研究 I では、NICU で乳児から分離された環境で、限られた機会をえて母親がいかに我が子との関係を構築していくかを、早期と中期の行動観察から、(1) 子どもの行動や発声や母親における横抱きから対面的な縦抱きへの変化として実証的に明らかにした。(2) そこには、我が子を未熟児として生んでしまった罪悪感から通常の関係構築しようとするポジティブな努力が観察されている。</p> <p>研究 2 は、そうした客観的な母子相互の変化から特に母親の内的な世界に焦点を当て、その主観的世界を質的に捉えようとしたものである。特筆すべきは、この研究によって母親の客観的な行動が、いかにその内面にある、例えば罪悪感が、むしろ遅れを取り戻しキャッチアップするための動機付けとして利用されるかという母子間の行動の総合的な理解が得られたことである。</p> <p>こうした研究 I と 2 の統合は一般的にみても、母子間の行動を客観的に捉えるのみでなく、その内面についても、エビデンスを担保しつつ総合的に捉えるという今日の心理学研究の雛型にもなっている。</p>
審査委員	(主査) 教授 藤田 宗和	
	教授 菅原 ますみ	
	教授 篁 倫子	
	教授 岩壁 茂	
	早稲田大学人間科学学術院 特任教授 井原 成男	